

宇奈伎語法庵主人 奥津敬一郎先生

乾 浩

先生との出会いは、学部の4年生のときだった。韓国語学科だった私は、韓国で日本語を教えたいという夢を持っていて、なんとかして日本語学専攻に入りたいと思っていた。そんなときに出会ったのが奥津先生だった。奥津先生は、韓国語にもご関心があり、日本語と韓国語の比較研究もされていた。奥津先生から学ぼう、そう思って大学院を受け、幸いにして合格し、先生の指導を受けることができた。

先生からは多くのことを学ばせていただいた。学問をする者にとって、論文の書き方や技術的なものも大切だが、それよりもまず、何事にも関心を持ち、追究していこうという姿勢が大切だということを、教えていただいた。論文を書いて、先生に見ていただくと、先生は、けして、こうしろとか、ここがだめだとかを、直接おっしゃってくれない。あくまでも自分で探らせようとアドバイスしてくれるのだった。その点で、結構悩まされたこともあったが、そのおかげで、自分でかなり深く考える習慣が身についたと思う。何事も自分でわかったと実感してはじめて、身につくものだということを教えてくださった。

論文を指導して下さっているとき、こんなことも教わった。論文だって読む相手がいるのだから、読むほうに興味を引かせなくてはならない。おもしろい論文、わかりやすい論文を目標にして書けと。しかし、わかりやすい論文というのは、逆をいえば、よく書けてなければいけないので、なかなか難しいのである。内容も、もちろん必要だが、題目をつけるときも、読者に読んでみたいと思わせるユーモアが重要だという。そんなユーモアに富む先生の代表格が「ウナギ文」という命名だろう。

教師たるものはユーモアもなくてはならないということも学んだのも先生からだった。先生の肩書きにはいつも「宇奈伎語法庵主人」とある。『「ボクハ ウナギダ」の文法』の「ウナギ文」の先生として知らない人はいない。先生は、文法としての「ウナギ」だけでなく、本当の「うなぎ」にも関心をもたれているようで、海外旅行に行かれると、かならずその土地のうなぎ料理を召し上がるそうである。

こんな話もしてくれた。「ウナギ」の先生で有名になって以来、先生が公演会にお話に行かれるときの昼食は、必ずとっていいほど、うなぎを出してくれるそうだ。『「ボクハ ウナギダ」の文法』で、うなぎにしておいてよかったよ。もし「ボクハ ラーメンダ」にしていたら、恐らく毎回公演会の際の昼食はラーメンだったかもしれないな、と。

先生は、学問的な指導だけではなく、学生のその後の進路まで心配してくださった。特に日本語学専攻の学生は修了すると、たいていが日本語教師になる。しかし、その就職先を見つけるのはかなり難しい。先生はそういった学生たちの就職口を探すために、自ら、韓国、台湾、タイに赴かれ、各国の日本語教育をしている大学機関を訪問された。そのおかげで、現在、韓国、台湾などの日本語教育機関で、卒業生たちが教鞭をとっている。

先生からは学問的な面以外にも、いろいろなことを学ばせていただいた。先生が、韓国日本語教育学会で公演を頼まれ、韓国釜山に行かれたとき、私たち先生のゼミの学生も8人ほど、旅行を兼ねて釜山に行った。公演会は無事終わり、その夜、全員でホテルの地下にあるナイトクラブに行った。大きい広いスペースに、真中にグランドピアノがあり、その横にダンスをする場所がある。それを囲むような形で、テーブルと椅子が並べてあり、私たちはそこでお酒を飲んでいて、ピアノ演奏に合わせて女性シンガーが歌を歌っている。本来ならそれに合わせてダンスをするはずなのだが、どの客も恥ずかしいのか誰も踊りに行かない。そのとき、先生が何も言わず、すっと席を立ち上がり、一人でグランドピアノの横のダンススペースへと行き、ダンスを始めた。すらっとした紳士が、一人リズムに乗りながらダンスする姿は、すごく絵になる光景だった。格好よかった。慌てた私たちは、誰か行かなくては、と戸惑い、話し合いの末、女の後輩を送り出した。先生と彼女はチークを踊り始めた。これまた格好いい。曲が終わるまで、他の客も踊りに来ず、その場所は二人だった。曲が終わると先生は、すぐには戻ってこなかった。ピアニストの男と、女性シンガーに声をかけた。何か一緒に飲まないか。グランドピアノの周りに椅子を持ってきて、そこで4人は何か話しながら、先生のお酒を飲んでいて、それを見て、私は、なんとも感動した。男はこうじゃなくてはいけない。先生から男学を学んだ。私は、学問を続けていく一人として、先生から学んだことを忘れずに、努力していきたいと思う。

奥津先生、長い間ありがとうございました。これからも、ご健康でご活躍くださるよう私たち一同、心よりお祈り申し上げます。